

偽書叢

序

總論

速水行道著

特別

11

1767

1



偽書叢

序

總論

41
1767
1

偽書叢序

掛纏毛畏岐皇大御國者千速振神代
 從高照日之御子之都賀乃樹乃弥繼
 嗣尔所知行乍璞之年數多最安良蟹
 治來往乎三粟乃中津代從禍津日神
 之荒備無止時効薦迺乱你乱而其母
 侘繁世乃狀有志袁直毘神之御魂迹

去
水
五
味
均
平
鹿

30
01

依ヨリ天テ然サ霜シ荒モ備アラ二ニ荒アラ備ビ義テ之シ神カ乃ノ心ココ耶ヤ
安シ定ビ兼ケ玉タ匣ミ再シ如シ本ト來ヨ治リ底チ世ヨ間ノ壽シ奚シ
久ク奈ナ面モ成ナ去ケ在ル然ラ者ハ玉タ緒ツ之ノ絕タ有リ並ニ
學マ之ノ道ミ漸ヤ々イ尼ニ開ケ行ケ而テ石イ上ノ故フル事コト偲シ人ヒト
々ト出イ來チ管ツ於コ此ミ道ニ勞イ萬ク々イ奴ヌ延エ久グ佐サ能ノ
目メ頰ツ敷シ書フ籍ミ等ド次ツ々イ於ヨ世ニ出イ太ス波ル宜ヨ鞞ヒ
宜ヨ寸キ事コト亦ナ有ル遠ラ百モ不タ足ラ何イ有ナ惡ハ者ノ之ノ所シ

爲ガ成ナ藍ラ中シ津ツ代ヨ乃ノ乱ミ丹ニ散チ逸セ名ナ耳ミ遺コ
有ル書フ等ド乎ラ似ニ著ツ布シ偽イ造リ利リ或ハ者ハ別コト尔ニ作ツ
設マ而テ古イ昔ニ之ノ人ヒト二ニ依ツ託ケ喚ツ鷄ハ空ウ蟬セ乃ノ世ヨ
人ヒト越ア欺サ類シ少ス有ル受メ學ブ迺ラ薦ナ莫ト輩モ者ハ奈ナ麻マ
余ヨ美ミ乃ノ甲カ斐ヒ無ク所ア欺ム底チ无ク下ノ之ノ鳴コ呼コ書フ
乎ラ詩シ文モ痛イ愛メ尊タ簡ツ其ソ嘘フ說ト鳥ヲ信ケ居ル波ハ惡シ
侶ト惡シ紀コト事ナ不ラ在ズ耶ヤ然シ者ハ雖モ有ル然ラ有ル偽イ書ハ

丹葉必偽乃破綻處有鬼煮手蔓絡石
之指者固難掩飛彈人乃巧有恭利難
見耳牡鹿巢蟹物識者波不欺得毛乃
廷有婆能其鑒定表經互社古書等庭
可據有祁禮於是比歲世之物識者等
乃所著書等之中二何晚跡論定垂事
迺多有乎犬馬鏡見得塗麻々迺々春

草乃瓜驗為有志賀何時毛百種尔餘
有塢此方彼方摘採天書集鶴二書梅
君物常成宿者是許迺物裳千代乃古
路將蹈見登蘆檜木之山口尔下徘徊
初學乃汁瓮庭成堂歟土令清書互
人荷面令見倍丘為三那利阿波祀寶
學迺將志徒者荒儀乃波乃鹿疎敷迺

亭鳴村肝之心表籠海藻古乃事實
 乎將明砥可勤學言丹魚藻有來時者
 嘉永六年十月如是言者速水行道



偽書叢卷上

總論

速水行道著

いでや今世尔在る古昔を學ばむや爲るを古書等に録て
 考索る事ある其書等小真ある有偽れる有正き有異
 る有雅ある有俗たる有先善く是を擇別て其偽きるや誤
 るるや俗たるを棄真なるや正さや雅たるを就て古を摺
 る物學を第一乃勤ふもけり是は皇國學乃之故ら
 此心定おく非ぬやち乃み階迷て終る正説を多
 難き事なりかし負文雜記卷十六等物も有正説を多
 るも有り偽を書多るも有誤を書多るも有其を見分る書
 は書物を數多博く讀覽多る智惠尔非きを見難し盡く書

を信せを書無り如じや孟子も有る能く見分て心得
を分る事ね難し然も多し書を其力を大
も見分る事難し然も多し書を其力を大
無書王元澤引古本孟子云盡信書不如無書
者慎所取而已矣有ハ慎所取則不知
勿學而已矣有ハ然る事取則不知
は先皇國の書籍乃起原及緊要有る書等乃有やうを辨
知てた堪ぬ事ハ有る初學乃爲今其大畧を辨ふ
抑皇國は言靈乃幸はふ國ハして播布國又十三言靈能佐吉
所佐國ハ上古ハ書籍云物無く言語の言語継つ、故
也有る事乃傳はて來ぬ。或人乃心し質直有るを唯有のま
ハ語継て少も狡意を駁す最よく傳來てふも有ける
是

齋部廣成宿禰の撰録て上る古語拾遺乃序ハ蓋聞上古
之世未有文字貴賤老少口相傳前言行存而不忘云々
管崎官記ハ夫尋其本體應神天皇之神靈也我朝書文字代
結繩之政創於此朝也見三善清行朝臣の勅文ハ上古
事出口傳ハ云々も多し然るハ神代ハ決神代ハ抄等の説
今神代の字ありやて寫し傳るも皆後人乃妄々其ハ非
委曲論多し伴前神代字辨を著してさて皇國ハ書籍乃首
らる事際やうハは知難けき也履中天皇紀ハ四年秋八月
始之於諸國置國史記言事是物記也事乃書ハ見多し始
中云ハ有る朝廷ハ既ハ史を置きて言事を記録さし
給ハし事決行ハ古事記傳卷一ハ此事を論いてそを其時
ハ往昔の事ハハ詔傳牙多しむさふくかつハ記しやむ
ハ往昔の事ハハ詔傳牙多しむさふくかつハ記しやむ

免らるる法ききものるハ其比ヨ 其古事記明官段ノ百濟國
主照古王以牡馬壹疋牝馬壹疋付阿知吉師以貢上云々又
科賜百濟國若有賢人者貢上故受命以貢上人名和通吉師
即論語十卷千字文一卷并十一卷附是人即貢進云々有
是漢字漢籍の参入も始りきは八月百濟王遣阿直岐
貢良馬二匹云々阿直岐亦能讀經典即太子莞道稚郎子
是秀也天皇阿直岐曰如勝汝博士亦有耶對曰有王仁者
也云々十六年春二月王仁來之則太子莞道稚郎子師之習
諸典籍於王仁莫不通達也有書籍を貢上る事見えは但
し此記を凡て甚く漢ふを賜て撰むる事見えは但
字書籍を神武天皇乃御世も既に有る事見えは但
もは上代文籍の御世も既に有る事見えは但
御世の始りて渡來し事跡を忌隱されざる物やと思はる
や記傳ハ三丁の論きたりてさて論語ハさる事あも思はる千

國史略 秘百按是時
先梁周興嗣二百手餘
美 二錄所製者也

字文を此時小貢りし云々は心得此御代の此ハ實
此書世間傳はる法きよけ免れ其書重く用むる
殊々世間後普く習誦む書物也其書重く用むる
御世也同書也師論多し今按小司馬炎魏主を廢して
位即たるハ神功皇后撰政乃六十五年乙酉小文成て
參來りたる其より廿一年の後免れ其間小文成て
百濟小傳を其より廿一年の後免れ其間小文成て
むも知法から交通證小疑論語は何晏集解千字文是魏鐘
蘇原本也予嘗見集解寫本朱點此比よてかつ言事を記
於此週古雅可愛云々云々
見元たるを推古天皇廿八年紀小是歲皇太子嶋大臣共議
之錄天皇記及國記臣連伴造國百十部并公民等本記
有之始なる 此皇太子嶋大臣有ハ厩戸皇子也藤我馬
子ちりてさて舊事紀ある國造本記ハ此時録さ

きたるが遺り傳をまきる採て載る物なるを合せ見る其後
平田翁を説き下るの舊事紀の條合せ見る其後
又天武天皇紀十年三月丙戌天皇御于大極殿以詔川島
皇子忍壁皇子廣瀨王竹田王兼田王三野王上野君三千忌
部連子首阿曇連稻敷難波連大形中臣連大島平群臣子首
令記定帝紀及上古諸事大島子首親執筆以錄焉九年正月
丁丑朔甲申忌部首子首云々の文を引て今本子首の子字
脱たり上文字子首を補す但し此説を引て今本子首の子字
二人るれ大島子首親執筆以錄焉有ハ何の子首ら
む知難し如原本のまは平群臣なる事明る子首ら
氏を記さるる見えれば是ハ大島子首の上各注
か脱るるや也見えれば二書やも小世間傳はら
文記傳卷一津御原乃大御世なる中此記の始ハ彼ら
記傳卷一津御原乃大御世なる中此記の始ハ彼ら

前よりしう後るしう知ガ多たをり彼撰此記の
偽や此序らるる内在る彼撰も正實たが虚
加牙多り多むる事思ふは此と彼と其趣別る世異未行記
の事も彼撰るるを思ふは此と彼と其趣別る世異未行記
事矣と序らるるを思ふは此と彼と其趣別る世異未行記
えありその別るるを思ふは此と彼と其趣別る世異未行記
史亦似るるを思ふは此と彼と其趣別る世異未行記
允るる序らるる其意序は是天皇親説は古の正實なるを
事記の序らるる其意序は是天皇親説は古の正實なるを
を此免れぬ給ふ由は有るは虚偽を削て後葉云
天皇紀二十九年春二月己丑朔癸巳半夜厩戸豊聰耳皇
子命薨于斑鳩宮有ハ彼撰録ハ事畢治を比しるる
しきて馬子ハ此後五年を經て斯て此天皇の御世比を故
二十四年の五月此後五年を經て斯て此天皇の御世比を故
事記せも史等漸多くなり小たま古事記の序も見え
たる如く正實違以虚偽を加牙たる物多有けきを今改

正し置えを古の正實の狀の幾ほども無く滅亡するもの
之愁坐を稗田何禮尔勅語して帝皇乃日繼及先代の舊辞
を誦習はし免給ひける哉事終てして崩坐ぬる尔よむて
徒尔為りぬるを元明天皇其大御志を迷給ひて和銅四年
九月十八日尔太朝臣安萬侶主尔詔命仰せて阿禮が誦習
たる舊辞を撰録せし免給牙るぬむ古事記尔を有ける事此
国史尔記し漏されたまは古事記の序尔委く見えあり
今其大略を記す物之をて此記詔命仰給牙る翌年の正月
廿八日尔業終て奏上らまたり其間僅く四箇月餘あり但
し尔かく新速る加しもた彼阿礼が詔の故を録せし
乃み尔して新速る加しもた彼阿礼が詔の故を録せし
も誦習はしむるハ舊記の本ををるるてそく爾誦るか
べて其語ををばく口をるるををるるてそく爾誦るか
を撰録し免給て先かく人の口をるるををるるてそく爾誦るか

一免賜ふハ識を重みし給ふが故なりや記傳二卷小論また
了然るハ開題記小論習を其舊辞尔配多る漢字を假
字を授ちて舊辞を誦習はし免給牙る有む斯て又同天
て師説ハ委しから文や有は是ハいふ有む
皇紀小和銅七年二月戊戌詔從六位上紀朝臣清人正八位
下三宅臣藤麻呂令撰國史印本清人下正八位下四字を脱
也見えたまは是も世尔傳はら文但し尔川島皇子等々詔命
事給牙るより三十四年を経たる尔川島皇子等々詔命
事意ハ免給はむ御心尔此人加給牙るや聞えたり
事斯在し免給はむ御心尔此人加給牙るや聞えたり
事國史ハ漏れたまは扶桑畧記尔和銅七年上奏日本紀
云く史云く川島皇子等々の知れしと爾川島皇子等々詔命
別亦撰はし川島皇子等々の知れしと爾川島皇子等々詔命
乃方尔大御心尔合行はし是も爾川島皇子等々詔命
も傳をら名心尔合行はし是も爾川島皇子等々詔命
行る法と記傳尔論まて其後元正天皇紀と養老四年

五月癸酉先是一品舍人親王奉勅修日本紀至是切成奏上
紀卅卷系圖一卷之有是今の日本紀なり
御系本書紀ハ持統天皇系圖決めて其の終る物修給見申少問題記其後の
またるハ実然る後小書綴り此の修給見申少問題記其後の
の之乃久安麻呂朝臣も與り給ふ古事記弘仁私記序漢
日本紀竟宴歌序等小見たり免給ふ古事記弘仁私記序漢
も問を盛らざる又書紀を撰ばしり免給ふ古事記弘仁私記序漢
まりたるは好ましく世給ふを撰ばしり免給ふ古事記弘仁私記序漢
たて考す加へて漢文を立れしを足る漢史に比ふ事
も考す加へて漢文を立れしを足る漢史に比ふ事
立ち記傳ハ一論ハ免給ふを撰ばしり免給ふ古事記弘仁私記序漢
由縁大抵斯の如し阿波禮此二書はし典籍乃祖乃か

少も闕逸る事無く今世存するもの最も多し最も喜
しき事ハ乃有ける今嘉永六年千四百四十二年ハ
記を以て華鬘山蔭等小委曲論多事少からん此古事
斯て後を續日本紀撰者ハ菅野真道朝臣藤原朝臣繼
終て奏進らまは御代ハ文武天皇の元年八月十六日
年十二月まで九御代ハ藤原朝臣諸公等上らまは御
四十卷日本後紀の兼和八年十二月終て奏上らまは御
是延暦十一年の事ヲ録されたる藤原朝臣良房公等
代ハ延暦十二年の事ヲ録されたる藤原朝臣良房公等
の僅ハ十卷存る事ヲ録されたる藤原朝臣良房公等
年八月二十日畢て奏進らまは御代ハ藤原朝臣良房公等
長十年二月五日嘉祥三年三月八日仁明天皇の實録中一

せらるる文徳實錄撰者ハ藤原朝臣基経公等申上りて陽成天皇
廿卷有之是ハ即天皇御代嘉祥三年十二月十日天安二
年八月十日藤原朝臣時平公等申上りて醍醐天皇の延喜元年八
月二十日藤原朝臣時平公等申上りて清和陽成光孝の御世天
安二年八月十日藤原朝臣時平公等申上りて清和陽成光孝の御世天
録撰者ハ藤原朝臣時平公等申上りて清和陽成光孝の御世天
安二年八月十日藤原朝臣時平公等申上りて清和陽成光孝の御世天
補云云然て此中後紀の記述ハ日本逸史ハ菅原大臣字多天皇
乃年代の事考録及類聚國史ハ菅原大臣字多天皇
て上件の國史ハ見えたる事件を部を分て録し給ふ存て文
化年ハ仙石政和主校正して今僅ハ六十卷ばかり存て文
木何ハ為てう其後ハ此舉絶ぬき爲要有る事件も多
遺漏て傳來に爲てぬ尤惜し死をりけり然有る

猶家々の記録或ハ物語等の傳はまるも少からば此彼通
はし覽て時世の状をも知る事ハ皇國の書籍の事ハ尾
書一覽ハ大抵載て其大畧をも記したる古書等ハ姓氏録
の書ハ又近曾伴前著述に於て史籍年表ハ殊ハ學者
の書ハ又近曾伴前著述に於て史籍年表ハ殊ハ學者
萬多親王等の撰給るハ嵯峨天皇の弘仁六年七月
終て奏進ら小の撰給るハ嵯峨天皇の弘仁六年七月
本律是ハ文武天皇の大室元年小刑部親王藤原朝臣不
養老年中又勅して刊修し給て十卷有之是ハ天皇の
要抄今法曹至要抄ハ僅ハ四卷ハ金掌中抄ハ修撰至
有共野公等類聚ハ收免たハ令是給て共後小修撰至
眞入夏野公等類聚ハ收免たハ令是給て共後小修撰至
天長十年二月令剛て奏進ら生し小十卷有之但し是
倉庫盤疾の二令剛て奏進ら生し小十卷有之但し是
本爾輯録せま猶全からぬ

書なり此餘内裡式及新儀式等ありきて今古語拾遺是弘仁式也有ハ偽書なり未出せり如シ古語拾遺是天皇の大正二年二月齋部宿禰廣成王古道の類麁風土記是ハ元明天皇の和銅六年まゝ醍醐天皇の延長三年小諸國の風土記を徵給ひし事見えたる毎國進めける有つらめや今存なきを出雲常陸肥前豊後等皆爾後其餘ハ傳をら文此餘總國風土記に有や皆爾後物乃倭名抄臣ハ醍醐天皇の公主勤子内親王の爲尔源順朝世間ル行をるに等あて何まも正し記古書なりを殊尔詳本して廿卷有るに等あて何まも正し記古書なりを殊尔熟讀明ら免て古代の風を辨ふ法古書ハ猶多有や今を其要や有をのえ擇出たり是等熟讀了らぬ不博く讀通る法然右の書等寫本ハ更も云を訂正し本も用尔立難此餘西山公の撰給る日本史小松天皇の御世

までの事等を諸書小考て録比を於るふて二百四十六卷有て最珍たき書なり但し皇朝の史を皆謂編年録は始て紀傳や禮儀類典是ハ諸家の記録數部の中より録し給ひし及塙檢校の群書類聚此千二百七十三部六百廿六の類又必見る法き書るり古書等の事ハ多き事長けきを此處に盡し難し別古籍提要を著して委く辨ふ法今を唯偽書を輯録せる因尔聊正書の事及傳さて初發尔も論ずる如く今の世尔在て古代の事を知むや爲るや唯書籍に就て考索むる事なる哉如何邪ふ奸人乃所爲邪らむ非ぬ偽書を造て出て世人を誑惑せし少から文識者ハ其非を察知て欺罔ハ受はきや學乃藹有ぬ人ハ是を正實として信居も多有邪

其の草紙物語如々の類も猶許はるはき我彼舊事記
及舊事大成經の類も天皇の御筆に係る最重記事なる浅
非ぬ妄説を真しやうに記録して世人を眩惑せし甚輕う
らぬ罪なりかし大減經を偽造せる是世僧潮音等二人其
る見えた神書故實の書軍書等も殊る偽造多かり其玉
卷十一三部神經の拙き偽書なるを論じて神道者
いふ輩の家をかりるをうた書ども多かるなり云
ま秋草卷下偽書條々武家の故實乃書せしむるたま
あるも近世乃人妄作したる偽書なり皆古書合はる物
なり云々又桂秋齊が書たる武門故實百箇條同作取馬故
實の類武門の事を知てして知る多し十六杖束見聞
記したる物を論る條々見えて又負文雜記卷十六杖束見聞
私記等の事を論る條々如此也偽書も多し古書のやう
に造りて古書非ざる物多し妄信仰し難し我身博學の
ら交眼明らかなるがれをたぶらるはる事あり公家武

兵家草紙卷云近世系圖知り云者有て諸家の系圖を
妄り偽作して其祖を誤る人甚多し是淺羽氏の始と松下
重長相繼て諸家の系圖を偽作せし又多々良玄信と云盲人
あり諸家の系圖を詔胸して望み随て妄作し侍る云々
こえくも猶沢田源内と云者系圖を偽作し事あり本篇
大系圖の條俟見候し

121

古筆の偽造多う其ハ安齊隨筆卷十二
七段五十一世
古筆手鑑と云物あり予ハ教多見し事あり何まの手鑑
ハ卷頭ハハ必聖武天皇並光明皇后の書給りし佛經の切
之を出せし彼佛經の切教多の手鑑ハ張る程ハ多くハ
傳ハる事ハ似せしものなる事ハ古筆を識鑒する
者ハ金銀を取る為ハ在る事ハ極ハ者ハ極ハ云事ハ
がつりあき事あり私ハ多持主賣物ハせや為り極ハ
札を取るあり正筆ハてなくとも極札たりあはば正筆
るハた刀劔の極札を取るハ賣物ハせんが為なり有
と思ふなり

古筆の偽造多う其ハ安齊隨筆卷十二
七段五十一世
古筆手鑑と云物あり予ハ教多見し事あり何まの手鑑
ハ卷頭ハハ必聖武天皇並光明皇后の書給りし佛經の切
之を出せし彼佛經の切教多の手鑑ハ張る程ハ多くハ
傳ハる事ハ似せしものなる事ハ古筆を識鑒する
者ハ金銀を取る為ハ在る事ハ極ハ者ハ極ハ云事ハ
がつりあき事あり私ハ多持主賣物ハせや為り極ハ
札を取るあり正筆ハてなくとも極札たりあはば正筆
るハた刀劔の極札を取るハ賣物ハせんが為なり有
と思ふなり

武家記録
安存隨筆卷十五
細云今世小笠流を稱して武家の
礼式を教る者あり往年浪人水嶋傳左工門と云ふの後判
髪してト也と云此者彼小笠流を廣め教たし彼ト也
浅智ある者も様々故実なる識者ハ彼書と見賤し世
弘たて偽説専作甚多きゆる識者ハ彼書と見賤し世
家の記録ハ皆此類にて取足らざる者として古き武家
の實録をト一様心得て見る者ト世を歎くべき事
を公家故実を學ぶ者ハ弥武家の書を賤し其甚し云
彼ト也が偽作専説の上其徒年々猶又偽作専説を増補
して其説盛行する謗目目ク千人目アキ千人と云ハ
昔の事今ハ目ク千人目アキ一人あるらるるハ
他国の事ハ知らず江戸ハ延享の頃とて文学廢まて行
まを貴賤暗愚貪欲するま

武家記録

129

安存隨筆卷十五
細云今世小笠流を稱して武家の
礼式を教る者あり往年浪人水嶋傳左工門と云ふの後判
髪してト也と云此者彼小笠流を廣め教たし彼ト也
浅智ある者も様々故実なる識者ハ彼書と見賤し世
弘たて偽説専作甚多きゆる識者ハ彼書と見賤し世
家の記録ハ皆此類にて取足らざる者として古き武家
の實録をト一様心得て見る者ト世を歎くべき事
を公家故実を學ぶ者ハ弥武家の書を賤し其甚し云
彼ト也が偽作専説の上其徒年々猶又偽作専説を増補
して其説盛行する謗目目ク千人目アキ千人と云ハ
昔の事今ハ目ク千人目アキ一人あるらるるハ
他国の事ハ知らず江戸ハ延享の頃とて文学廢まて行
まを貴賤暗愚貪欲するま

九

古今圖書集成... 卷之十... 桂秋存... 此秋存初多田兵部名義後... 近奉国学名高き人... 然まこと偽を好む癖あり豪傑... 疑はしき者多し中臣後元吹抄古物彙画と云書を引け... 武門故実百箇條より古物彙画と云書を引け其記を... 所古物非や妄作なり己が著わして己が引たる... 此引る書を記す所古実非や己が妄説を實し世人... が為し品々書を作り置る古書と偽を時々取出して引用... たる者に見ゆ秋存の書ハ疑ハしくて取らるし毎書全篇... 偽りの有まじくはれども偽交る故おろつるなく用難し

124

安存隨筆卷十 緒十云桂秋存此秋存初多田兵部名義後
近奉国学名高き人然まこと偽を好む癖あり豪傑
疑はしき者多し中臣後元吹抄古物彙画と云書を引け
武門故実百箇條より古物彙画と云書を引け其記を
所古物非や妄作なり己が著わして己が引たる
此引る書を記す所古実非や己が妄説を實し世人
が為し品々書を作り置る古書と偽を時々取出して引用
たる者に見ゆ秋存の書ハ疑ハしくて取らるし毎書全篇
偽りの有まじくはれども偽交る故おろつるなく用難し

亦も兼平天曆乃此より偽書多く山来其後又堀河院ら
後時よりありぬ偽書ども重きや云きたり此の兼平
や有ハ同言ハ舊事紀の事を云てハ兼平天曆を交て作
乃人の古事記日本紀を合せてその野説私説を交て作
まる物れ云く論述河社ハ人管の事を論じて六十
餘国を物の名よめる歌ハ殊も用ふるたぬとの物
此れがハ足喜天曆の後乃作者の猶初學乃為ハ先輩乃
ちとざる論述有ハて知たし
乃偽書の事ハ涉ぼるもの哉一ニちハ奉法其ハ玉勝
間卷二 松嶋日記の事 小を法て近き年おろハける偽書
を論ずる條 之を法り出るたぐひ乃とハ多くるえりぬき
おなくのいとま成しま心をもらぐきてよの人をまが
さむやまらハいらぬる多ぶハ心くらけむよくするた

乃見るもをまといつちりハいとよくえりぬき
おるも色やけむかたぬハいとよくえりぬき
えりぬきの世もおろきむげの偽書多し
がむらきて多ふといてやをぬるハいとよくか
らいとよくかるべきとぞ近きらハ世中ハえづ
書をえりぬるもがら多きをえづハおろの物
らぬがおろきをゆるんてよえりぬき
見え秋草卷下 雜事部諸ハ偽書のハ世偽書多し
り古書を多く見たる眼ハ非ま彼偽書ハ
より博く古書を覽る法ハ事あり古代の中ハ其
+

石判下書名を以て是
偽書と云ふ者多ク
一、レト欲
と云ふ心
をりかし

この風俗にして其時代の詞と其時代の文体の
偽書を作る人々これを知て其時代の風俗今の詞今の
躰を以て書き且或ハ年号人名引書の時代前後の取違等
らもあきららゝて偽作ハ露見し偽書と造る不々の人ハ
必智恵浅きが故也たゞうざる事多しをべて偽リハ必
露ハ物有りいまめ慎む法しや有る此等の説は從
い努く陳畧尔を法からん清人姚首源が古今偽書考に云
滋多于世學者于此真偽莫辨而尚可謂之讀書乎是必取而
明辨之此讀書第一義也也論云ハ実尔然る事ありて
此書易傳より杜律虞注尔至るまで七十部の偽書を載せ
まゝ真書雜以て偽者八部本非偽書而後人妄託其人之名者
六部兩人共此一書名今傳者不知為何人作者一部書非偽
而書名偽者二部未足定其著書之人者四部共九十一部

の書を載たり但し是ハ其自序尔凡今世不傳者與夫瑣細
無多者皆不録焉云云以四部有集者別集人難以偽古集
間有一二附益偽撰不足称數故不之及子類中二氏之書亦
不及焉云云知る此ハ収載たるハ其尤けき物のいふ
偽書ハ猶多かる事なり其ハ四庫全書尔舊本題云蓋依
託也云云る書の影を見たり知る法は予非尔輯録
せる物有るを以て此偽書考學者尔切ある書なり必讀置
しはるハ鈴屋翁も説きたる古學を為す徒ハ漢籍をも讀
ばる事なきを以て其説玉勝間又爰尔意得法き事あり其
等尔見えたり云云死する也又爰尔意得法き事あり其
は古書尔を換入云云事らして全體ハ正し記書行るを後
人妄尔附益して原文の如きまらざる一切の造書行らば
其偽ハ知易かきぞ此換入尔を以て其人を欺くるその
又聊し物論多る人等其偽説を以て何ぞや思はる全
又聊し物論多る人等其偽説を以て何ぞや思はる全

眞^{マコト}の^{マコト}を^{マコト}知^チて^{マコト}疑^ウふ^{マコト}を^{マコト}知^チま^{マコト}を^{マコト}見^ミ 熟^{ジュク}く^{マコト}擇^{タク}別^{ベツ}を^{マコト}き^{マコト}ま^{マコト}り
さて^{マコト}其^{マコト}眞^{マコト}偽^{マコト}を^{マコト}觀^{カン}破^ハる^{マコト}を^{マコト}全^{ゼン}書^{ショ}と^{マコト}熟^{ジュク}通^{ツウ}して^{マコト}其^{マコト}首^{シュ}尾^ビを^{マコト}
照^{テウ}し^{マコト}見^ミる^{マコト}時^{マコト}ハ^{マコト}換^{カン}入^ニ文^{マコト}ハ^{マコト}其^{マコト}事^{マコト}の^{マコト}年^{マコト}代^{マコト}を^{マコト}差^サる^{マコト}或^{マコト}ハ^{マコト}其^{マコト}言^{マコト}の^{マコト}
前^{マコト}後^{マコト}齟^ソ齬^ゴ牙^{マコト}る^{マコト}或^{マコト}ハ^{マコト}後^{マコト}世^{マコト}證^{マコト}の^{マコト}古^{マコト}書^{マコト}ハ^{マコト}其^{マコト}事^{マコト}の^{マコト}年^{マコト}代^{マコト}を^{マコト}差^サる^{マコト}或^{マコト}ハ^{マコト}古^{マコト}言^{マコト}の^{マコト}
其^{マコト}旨^{マコト}意^{マコト}皆^{マコト}本^{マコト}老^{マコト}子^{マコト}然^{マコト}考^{マコト}其^{マコト}書^{マコト}蓋^{マコト}駁^{マコト}書^{マコト}也^{マコト}其^{マコト}渾^{マコト}而^{マコト}類^{マコト}者^{マコト}少^{マコト}竊^{マコト}取^{マコト}他^{マコト}
書^{マコト}以^{マコト}合^{マコト}之^{マコト}者^{マコト}多^{マコト}凡^{マコト}孟^{マコト}子^{マコト}數^{マコト}家^{マコト}皆^{マコト}見^{マコト}割^{マコト}竊^{マコト}曉^{マコト}然^{マコト}而^{マコト}出^{マコト}其^{マコト}類^{マコト}其^{マコト}意^{マコト}
文^{マコト}辭^{マコト}又^{マコト}牙^{マコト}相^{マコト}抵^{マコト}而^{マコト}不^{マコト}合^{マコト}不^{マコト}知^{マコト}人^{マコト}之^{マコト}增^{マコト}益^{マコト}之^{マコト}歟^{マコト}或^{マコト}者^{マコト}衆^{マコト}爲^{マコト}衆^{マコト}歟^{マコト}以^{マコト}
成^{マコト}其^{マコト}書^{マコト}歟^{マコト}今^{マコト}刪^{マコト}去^{マコト}謬^{マコト}思^{マコト}亂^{マコト}雜^{マコト}者^{マコト}取^{マコト}其^{マコト}似^{マコト}是^{マコト}者^{マコト}又^{マコト}頗^{マコト}爲^{マコト}其^{マコト}意^{マコト}藏^{マコト}
于^{マコト}家^{マコト}案^{マコト}河^{マコト}東^{マコト}之^{マコト}辨^{マコト}文^{マコト}子^{マコト}可^{マコト}謂^{マコト}當^{マコト}矣^{マコト}其^{マコト}書^{マコト}雖^{マコト}偽^{マコト}然^{マコト}不^{マコト}全^{マコト}偽^{マコト}也^{マコト}謂^{マコト}之^{マコト}
駁^{マコト}書^{マコト}良^{マコト}然^{マコト}云^{マコト}ハ^{マコト}有^{マコト}是^{マコト}是^{マコト}也^{マコト}但^{マコト}し^{マコト}駁^{マコト}字^{マコト}ハ^{マコト}駁^{マコト}也^{マコト}向^{マコト}く^{マコト}字^{マコト}書^{マコト}ハ^{マコト}
馬^{マコト}色^{マコト}不^{マコト}純^{マコト}也^{マコト}り^{マコト}り^{マコト}て^{マコト}馬^{マコト}の^{マコト}毛^{マコト}乃^{マコト}駁^{マコト}也^{マコト}を^{マコト}云^{マコト}ハ^{マコト}り^{マコト}古^{マコト}書^{マコト}ハ^{マコト}換^{マコト}入^{マコト}

あ^{マコト}る^{マコト}狀^{マコト}實^{マコト}然^{マコト}又^{マコト}故^{マコト}尔^{マコト}造^{マコト}添^{マコト}た^{マコト}る^{マコト}を^{マコト}非^{マコト}で^{マコト}注^{マコト}釋^{マコト}偽^{マコト}書^{マコト}裏^{マコト}書^{マコト}等^{マコト}
云^{マコト}は^{マコト}死^{マコト}も^{マコト}有^{マコト}り^{マコト} 乃^{マコト}不^{マコト}中^{マコト}本^{マコト}文^{マコト}ハ^{マコト}換^{マコト}ま^{マコト}る^{マコト}有^{マコト}り^{マコト}是^{マコト}ハ^{マコト}本^{マコト}篇^{マコト}に^{マコト}載^{マコト}が^{マコト}ま^{マコト}を^{マコト}誰^{マコト}も^{マコト}見^{マコト}馴^{マコト}
たる^{マコト}印^{マコト}本^{マコト}乃^{マコト}日^{マコト}本^{マコト}紀^{マコト}尔^{マコト}て^{マコト}其^{マコト}例^{マコト}を^{マコト}一^{マコト}二^{マコト}爰^{マコト}尔^{マコト}云^{マコト}云^{マコト}其^{マコト}を^{マコト}神^{マコト}代^{マコト}
卷^{マコト}天^{マコト}岩^{マコト}屋^{マコト}戸^{マコト}段^{マコト}尔^{マコト}時^{マコト}有^{マコト}高^{マコト}皇^{マコト}産^{マコト}靈^{マコト}尊^{マコト}之^{マコト}息^{マコト}思^{マコト}兼^{マコト}神^{マコト}云^{マコト}者^{マコト}云^{マコト}ハ^{マコト}云^{マコト}
ら^{マコト}云^{マコト}字^{マコト}古^{マコト}本^{マコト}傍^{マコト}訓^{マコト}尔^{マコト}て^{マコト}云^{マコト}ハ^{マコト}ノ^{マコト}カ^{マコト}ミ^{マコト}ト^{マコト}云^{マコト}カ^{マコト}ミ^{マコト}ア^{マコト}リ^{マコト}也^{マコト}有^{マコト}る^{マコト}
云^{マコト}字^{マコト}の^{マコト}本^{マコト}文^{マコト}ハ^{マコト}換^{マコト}ま^{マコト}る^{マコト}れ^{マコト} 伴^{マコト}翁^{マコト}の^{マコト}校^{マコト}本^{マコト}ハ^{マコト}云^{マコト}字^{マコト}災^{マコト}史^{マコト}元^{マコト}々^{マコト}集^{マコト}
印^{マコト}本^{マコト}尊^{マコト}字^{マコト}を^{マコト}脱^{マコト}せ^{マコト}り^{マコト}又^{マコト}神^{マコト}武^{マコト}元^{マコト}皇^{マコト}紀^{マコト}首^{マコト} 自^{マコト}天^{マコト}祖^{マコト}降^{マコト}跡^{マコト}以^{マコト}逮^{マコト}于^{マコト}
類^{マコト}史^{マコト}及^{マコト}古^{マコト}本^{マコト}ハ^{マコト}有^{マコト}り^{マコト} 今^{マコト}一^{マコト}百^{マコト}七^{マコト}十^{マコト}九^{マコト}萬^{マコト}二^{マコト}千^{マコト}四^{マコト}百^{マコト}七^{マコト}十^{マコト}餘^{マコト}歳^{マコト}也^{マコト}有^{マコト}る^{マコト}を^{マコト}比^{マコト}古^{マコト}婆^{マコト}衣^{マコト}卷^{マコト}
一^{マコト}日^{マコト}本^{マコト}考^{マコト}小^{マコト}自^{マコト}天^{マコト}祖^{マコト}云^{マコト}ハ^{マコト}の^{マコト}二^{マコト}十^{マコト}二^{マコト}字^{マコト}印^{マコト}ハ^{マコト}其^{マコト}餘^{マコト}の^{マコト}本^{マコト}也^{マコト}
も^{マコト}多^{マコト}く^{マコト}本^{マコト}又^{マコト}小^{マコト}音^{マコト}連^{マコト}符^{マコト}を^{マコト}契^{マコト}中^{マコト} 田^{マコト}東^{マコト}麻^{マコト}呂^{マコト}等^{マコト}の^{マコト}校^{マコト}本^{マコト}に^{マコト}

細山子の故意を一きよく謹みふるルまづ通本一如
く一續連きを多歴年所自天恒作跡の九字共意望ア
無用ル聞申然まば其二十三字を細字一書て本文一為ガ
る本も正しレ起レつレねレがらレ其レ訛一原は後人の傍書
あレてレ注を注の如く書入たる本一なるレ法一く通本一を其傍書
を見て脱文を書加へたるも一ありレ心得誤レて即本文
小書換へたるものなるレ法一き事相照して知レ法一きレ紀中
此餘然る類の混ハひ彼此見エ多クり一崇神六十五年一知レ令
朝貢一見エたるレ伏の垂仁二年一是年任那一人一種一知レ令
智請一之一欲一歸一于一国一蓋一先一皇一之一世一來一朝一未一還一後一云一々一ら一る一蓋一以
下の十字一を後人前記一を一踏一見一を一く一して一旁書一せる一本一蓋一以
小換入たるもの一れレる一あレて一決一し一か一る一類一の混ハひ一あレる一

や有レ是等一准一了一て其餘一を知レ法一きレ比古婆衣一亦一説一ま一たる
か一神代卷一後一ハ一髻山一蔭一々一委一論一き一此餘一衍文一有一り一錯
たり一披一き一見一て一知一法一き一今一ハ一一一二一を一奉一る一る一此餘一衍文一有一り一錯
乱有レ異本一校合一て其謬誤一を訂正一を一法一き一但一疑一ひ一し一死
事有レや一私一改一正一む一法一き一と一小一を一非一文一校一意一改一る一を一改一え
け一る一小一を一及一ぎ一る一法一き一古一昔一ハ一撰一本一の一之一を一転一寫一す一る一
本文一を一文義判然一たる一事一初一学一の一徒一ハ一惑一ひ一易一し一難一
一除一却一た一ハ一愉一快一通一意一達一難一く一る一る一た一る一異一本一小一校一
一字一一語一た一ハ一や一も一略一ル一ハ一あ一ら一ぬ一事一小一あ一る一又一素
より偽書一を一非一る一後一人一漫一ル一附一會一て一古一人一の一名一代一負一ひ一る一
有レ自一物一を一載一し一る一議一一一明一道一記一の一類一行一は一其
る一れ一他一に一等一又一吐書一の一所一を一行一る一が一誤一て一改一書一添一
多一か一る一事一れ一又一吐書一の一所一を一行一る一が一誤一て一改一書一添一

廣く言ひ明かす
言ひ明かす
言ひ明かす
言ひ明かす

いしし或ハ素クヤウラ一書クニガ附録の如クハ

イモ弘運記の類ハ元是等の類知ても港ぬキハ

本篇の末ハ類聚附載セテ是類彼偽書考の末ハ出せ

書等ハ然テ古書ハ斯レ誰有るハ初學乃徒然事

知らで一切信ハ居るハ慷慨キハ今其偽書等乃事

先輩の説ハ所見多る者ヲ輯録して如何者ハ容易

其真偽ヲ辨知テ正學ヲ為シテ措キハ但し本篇ハ

者ハ其偽ヲ辨知テ正學ヲ為シテ措キハ但し本篇ハ

載ハてハ有ルニシテ見テハ難クハ因テ録シテ示

其説ハ先輩の説ハ及ビテハ此ハ私説ハ非ルヲ

論定ハ其非キヲ知ルニテ又本篇ハ載ルハ古事記序

小見エタル澤御原ノ宮ハ御宇天皇ノ詔命前ハ引

小當今之時不改其失未經幾年其旨欲滅斯乃邦

化之鴻基為故惟撰錄帝紀討覈舊辭削偽定實欲

之傳ハ此ハ一句殊ハ古學の要ハ有ルハ最モ可畏

事ハ後ハ學者此ハ大御心ヲ心ニシテ荒唐の偽説

正眞の實學ハ從事ハ其ハ



